

資源評価調査事業

山川 卓・清水康弘・久野正博・山田浩且・石川貴朗

目的

我が国周辺における重要漁業資源の資源量評価、動向の予測、最適管理手法の検討のために必要な基礎資料を収集するため、水産庁の「資源評価調査事業実施要領」に基づき調査を実施する。

なお、各漁業資源の資源量評価、動向予測等については、水産庁中央水産研究所によってとりまとめられるため、ここでは本県が委託を受けている6魚種（マイワシ・カタクチイワシ・ウルメイワシ・サバ類・マアジ・スルメイカ）の本県沿岸域における本年度の漁況特性についてとりまとめる。

方法

1. 漁場別漁獲状況調査

県下の中型まき網13ヶ統、沖合底曳網1ヶ統から漁獲成績報告書（月報）を徴収し、漁場別漁獲動向を把握した。

2. 水揚げ調査

県下主要水揚げ港（白子・河芸・安乗・波切・片田・和具・贄浦・奈屋浦・神前浦・錦・紀伊長島・九木の12港）において、日別、漁業種類別、魚種別漁獲量を調べた。

3. 生物測定調査

県下主要港に水揚げされたマイワシ、カタクチイワシ、サバ類、マアジについて魚体測定を行い、漁獲物の生物特性を把握した。

4. 卵稚仔分布調査

毎月1回、伊勢湾および熊野灘の所定の定点（計12定点）において改良型ノルパックネットの鉛直曳きを行い、調査対象種の卵稚仔出現動向を把握した。

結果

調査結果に基づく調査対象魚種の本年度の漁況特性は以下のとおりである。なお、ブリの漁況については、イナダ、ワラサ、ブリは本事業報告の地域レベルでの漁況海況情報の提供 Ⅲ（定置網漁獲統計調査）の項で、モジャコは平成12年度漁海況予報関係事業結果報告書でそ

れぞれ詳細に報告されているのでここでは省略する。

1. マイワシ

熊野灘主要港（奈屋浦・贄浦・錦・紀伊長島）における2000年度（平成12年度）の中型まき網によるマイワシの漁獲量は5,139トンで、漁獲の低迷が続く近年においては前年度（5,791トン）に次ぐ比較的高い水準に達した（図1）。

前年度の1～3月（2000年1～3月）には大羽群を主体に合計で4,811トンの好漁を記録したが、近年の資源低水準期の傾向どおり、4月以降はほとんど漁獲がなくなった。例年見られる当歳群を主体とした夏季の漁獲も今年度はほとんど認められず、その結果、4～11月の合計漁獲量はわずかに34トンにとどまった。12月以降は越冬産卵群と思われる大羽群（被鱗体長19～22cm）、および2000年級群である小羽群（被鱗体長14～16cm）の漁獲が好調で、2000年12月～2001年3月の合計漁獲量は5,105トンとなり、今年度における漁獲のほとんどを占めた。

一方、伊勢湾（0歳魚を漁獲主対象）では、前年および前々年と同様、ほとんど漁獲はなかった（図2）。

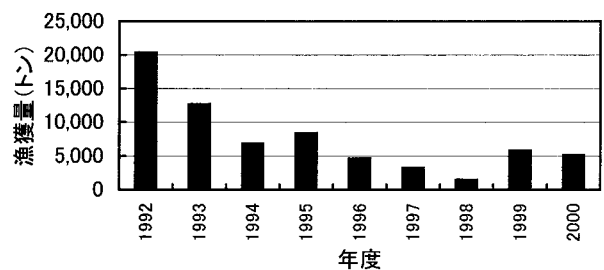


図1 熊野灘主要5港マイワシ漁獲量(中型まき網)

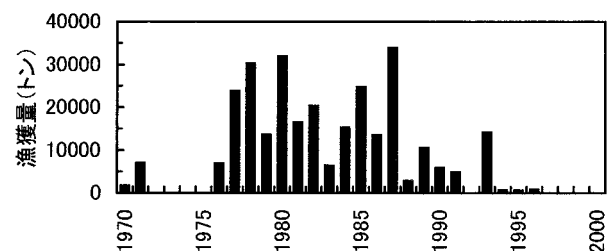


図2 伊勢湾主要2港マイワシ漁獲量

2. カタクチイワシ

熊野灘主要港（奈屋浦・贄浦・錦・紀伊長島）における2000年度（平成12年度）の中型まき網によるカタクチイワシの漁獲量は2,523トンで、近年で最高であった1998年度の漁獲量（3,791トン）には及ばないものの、それに次ぐ水準となった（図3）。2000年4月～2001年1月の間はサバ類やマアジの漁獲にごくわずかの混獲が見られる程度で、合計で38トンの漁獲量にとどまった。この時期のカタクチイワシは全国的に品薄で、カツオ一本釣漁の餌イワシの確保に苦勞する状況が各地でみうけられた。一方、2月に入ってから漁況は一変し、2～3月の合計漁獲量は2,484トンの豊漁となった。漁獲の主体は被鱗体長12～14cmの成魚群であり、ここ数年の熊野灘で続いている冬季の産卵親魚群（成魚大型群）の高水準での来遊が今年度も持続した形となった。

一方、2000年7月～12月の伊勢湾主要2港（白子・河芸）のバッチ網漁業による漁獲量は4,443トンで、豊漁であった前年（16,303トン）の27%という低水準であった（図4）。漁期当初（7月23日解禁）から8月下旬までは、被鱗体長8～10cmの成魚小型群を主体に好調に推移したが、9月以降ほとんど漁獲されなくなった。11月末～12月にかけて、未成魚小型群（被鱗体長6～8cm）を主体として、若干の漁獲がみられたが、両月の合計で138トンにとどまった。

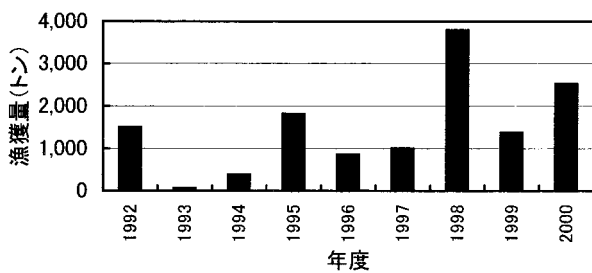


図3 熊野灘主要5港カタクチイワシ漁獲量(中型まき網)

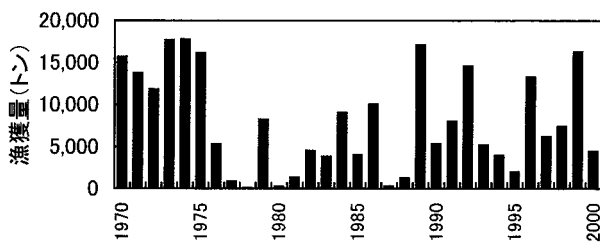


図4 伊勢湾主要2港カタクチイワシ漁獲量

3. ウルメイワシ

熊野灘主要港（奈屋浦・錦・紀伊長島）における2000年度（平成12年度）の中型まき網によるウルメイワシの漁獲量は572トンで、豊漁となった前年度（998トン）および前々年度（915トン）の漁獲量を大きく下回った（図5）。月別で最も漁獲の多かったのは、12月の236トンであった。8～9月には被鱗体長11～14cmの当歳群を主体に合計で136トンの漁獲があった。

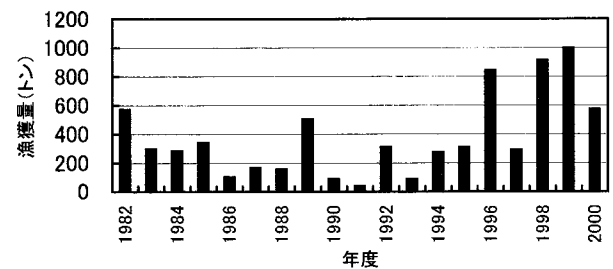


図5 熊野灘主要3港ウルメイワシ漁獲量(中型まき網)

4. サバ類

熊野灘主要港（奈屋浦、贄浦、錦、紀伊長島）における2000年度（平成12年度）の中型まき網によるサバ類の漁獲量は11,231トンで前年度の14,399トンには及ばなかったが（図6）、1992年度～1999年度の平均漁獲量10,941トンを上回った。尾叉長組成の推移等から判断すると、漁獲の主体はゴマサバ1999年級群であり、漁期を通じて好調な漁獲が持続した。とくに、1月～7月の漁獲量は合計で6,752トンであり、近年で最も豊度の高かった1996年級群の漁獲による1997年同期の漁獲量（7,828トン）に次ぐ漁獲量となった。8月以降の漁獲量はおおむね1,000～1,500トン前後/月の水準を維持したが、例年なら夏季～秋季に加入の見られる当歳群（2000年級群）の来遊水準が著しく低く、このため、全体としては平均的な漁獲量にとどまった。奈屋浦漁港でのサバ類全体に占めるゴマサバの混獲比は2000年度漁期全体で97.0%であった。マサバについては4～5月に数十トン/月の混獲が見られた程度であり、散発的な漁獲に終始した。

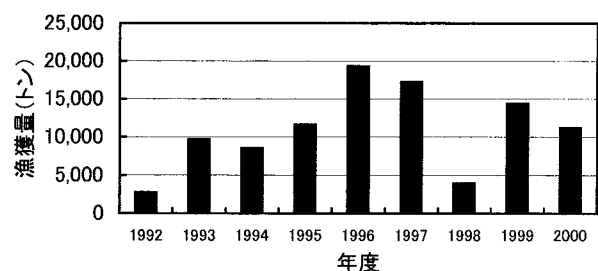


図6 熊野灘主要5港サバ類漁獲量(中型まき網)

5. マアジ

2000年度における熊野灘主要港（奈屋浦，贄浦，錦，紀伊長島）の中型まき網によるマアジの漁獲量は5,277トンで、1992年度以降で最高の値となった（図7）。とくに、4～8月の漁獲が1歳群（1999年級群）を主体に好調で、昨年秋季における1999年級群の好漁に引き続く形となった。夏以降は1歳群に加えて当歳群の漁獲も見られたが、秋季の好漁が続いていた近年の当歳群の漁獲状況と比べると、今年度の当歳群の加入は低調であった。11月の合計漁獲量は213トン、12月には98トンと低下し、近年の同期の漁獲量に比べて相当な低水準となった。

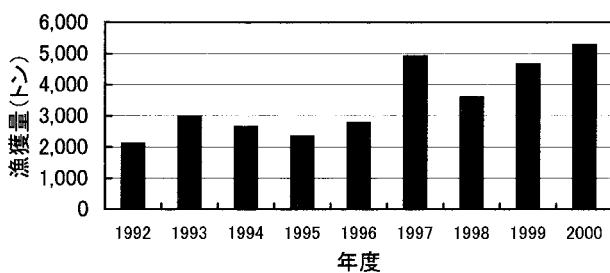


図7 熊野灘主要5港マアジ漁獲量(中型まき網)

6. スルメイカ

和具港(県下最大のスルメイカ水揚げ港)における2000年5～9月の一本釣りによるスルメイカの漁獲量は63ト

ンで、集計を開始した1984年以降で最低となった（図8）。月別での最高漁獲量は8月の27トンで、例年における月別最高漁獲量に比べて大幅に低かった。また、いずれの月においても1984年～1999年の各月の平均漁獲量を大幅に下回っており、期間を通じて低水準の漁獲に終始した。

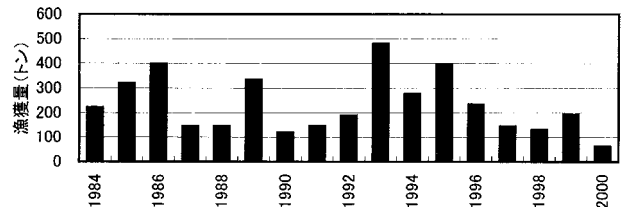


図8 和具港におけるスルメイカ漁獲量(一本釣り, 夏イカ漁(5～10月計))

関連報文

- ・長期漁海況予報(中央ブロック) No.112-114, 中央水産研究所.
- ・平成12年度漁海況予報関係事業結果報告書(漁海況データ集), 三重県科学技術振興センター水産技術センター(2001).
- ・山川 卓, 武田保幸: 熊野灘におけるマアジの成長と漁獲特性. 黒潮の資源海洋研究, 2, 27-34 (2001).